

第1章 2000年度京都大学構内遺跡調査の概要

鎌田元一 清水芳裕 千葉 豊

1 調査の経過

京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパス及び附属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事に際して、予定地の埋蔵文化財の調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果より、発掘、試掘、立合にわけて実施している。2000年度には、以下の発掘調査3件、試掘調査3件、立合調査7件、資料整理1件を実施した。

発掘調査	理学部校舎6号館新営予定地（北部構内B C 28区）	（第3章，図版1－276）
	共通管理棟新営予定地（本部構内A T 21区）	（整理中，図版1－277）
	（医病）基幹・環境整備（駐車場等）工事（病院構内A E 19区）	（発掘中，図版1－278）
試掘調査	（医病）基幹・環境整備（駐車場等）工事予定地（病院構内A E 18区）	（図版1－279）
	（南部）総合研究実験棟新営予定地（病院構内A F 13区）	（図版1－280）
	薬学部校舎新営予定地（病院構内A J 15区）	（図版1－281）
立合調査	南部総合研究実験棟設備工事（医学部構内A Q 18区）	（図版1－282）
	工学部物理系校舎（第Ⅶ期）新営予定地（本部構内A U 27区）	（図版1－283）
	総合研究棟新営電気設備工事（本部構内A Y 25区）	（図版1－284）
	総合人間学部耐震改修その他工事（吉田南構内A N 24区）	（図版1－285）
	農学研究科植物順化室新営工事（北部構内B I 33区）	（図版1－286）
	アジア・アフリカ地域研究科実験排水管理設工事（病院構内A F 15区）	（図版1－287）
資料整理	総合情報メディアセンター新営予定地（吉田南構内A N 22区）	（第2章，図版1－261）

2 調査の成果

前節で掲げた調査のうち、2000年度に整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお、吉田南構内（旧，総合人間学部構内）A N 22区，北部構内B C 28区の発掘調査の成果については、第2章，第3章でそれぞれ詳述している。

縄文時代の遺跡 吉田南構内A N 22区で扇状地の末端が検出され，崖面から遺物が多数出土した。こうした崖面は構内各所でみつかり，低地を臨む扇状地末端で人間の活動が広範に展開していたことを物語る。遺物の中では，早期の押型文土器が目される。黄島式が主体を占めており，この時期の様相を知る重要な資料となろう。

一方，北部構内B C 28区では，縄文晩期から弥生前期にかけての土器・石器が5000点前後出土した。出土土器の多くは突帯文土器で，それに晩期中葉の篠原式と弥生前期遠賀川

式が少量出土している。つぎに記す弥生前期の水田遺構とあわせて、縄文晩期の終末ごろから、調査地一帯で活発な活動が開始されたことを示している。

弥生時代の遺跡 B C 28区で弥生前期の水田遺構が確認された。当該期の水田遺構は220地点について2例目となり、貴重な事例を加えることとなった。微高地をはさんで、東側と西側に2箇所みられ、微起伏を巧みに取り込んで小規模な水田単位が複数設定されている状況がとらえられた。プラントオパール分析では、長期の耕作は想定できない、という結果が得られており、具体的な利用状況の検討が今後の課題となる。

A N 22区では、中期後葉の方形周溝墓とそれに供献された土器がみつかった。封土や主体部は削平により失われていたが、溝の状況から少なくとも4基、蓋然性は低いながらも2基の周溝墓が2列で並存する状況を復元した。溝中から、中期後葉の供献土器が多数みつかっており、この時期の編年と地域性を明らかにするうえで基準資料となろう。

古墳時代の遺跡 遺構はみつかっていないが、A N 22区で家形埴輪片が出土した。出土例のきわめて少ない5世紀前半の装飾性の高い大型品であることが判明した。

中世の遺跡 A N 22区では、12世紀後半から16世紀前半にかけて、溝・井戸・石室・土坑・集石などの多数の遺構とともに多量の遺物が出土し、活発な活動のおこなわれた地点であることが判明した。遺構・遺物の分布状況から、東西2つの空間に分離され、東側の空間は吉田社、西側の空間は藤原北家吉田殿の邸宅に関連する、と解釈された。

B C 28区では、15世紀以降、調査地一帯がひろく耕作地となっていたことが鋤溝のありかたから、判明した。花粉分析ではアブラナ科の卓越が示唆され、栽培作物を同定するうえで興味深い結果を得た。

近世の遺跡 B C 28区は中世に引き続き、江戸時代にも耕作地として利用されたが、低地部では水田となったことが堆積物の観察から想定された。その後、調査区周辺は幕末には、土佐藩邸の敷地となったことが絵図や周辺地区の調査から判明している。幕末の井戸からは、土佐藩邸の南限を画する堀跡から出土したのと同じ刻印瓦が出土しているので、本調査区も藩邸敷地内に属することが明らかとなった。

一方、A N 22区でも耕作に伴う無数の柱穴群や野壺、道路状遺構などを検出した。構内のほかの多くの地点同様、戦国時代から江戸前期の荒廃した時期をへて、調査地一帯が都市近郊農村の耕作地へと変転したことが明らかとなった。

病院構内A E 18区の試掘調査では、近世の遺物包含層が良好に残存していることが確認された。この成果をうけて、工事予定地全域に関して、発掘調査を実施した。